

開催地名	奈良県 桜井市
開催日時	令和7年1月30日(木)13:30~15:00
開催場所	桜井市役所本庁舎3階 災害対策本部室
語り部	高津 智子(岡山県岡山市)
参加者	40名
開催経緯	地震、台風、記録的豪雨など様々な自然災害が日本全国で多発している。 特に桜井市内には奈良盆地東縁断層帯が走り、最大震度7の地震が想定されているが、これまで大きな災害を経験したことがなく、災害時にどのような状況に陥るのか、どのような対応が求められるかなど、職員の災害に対する認識、意識が高いとは言えない状況であるため、災害対応を実際にされた方の体験談を聞き、防災意識の向上を図りたい。
内容	■真備町の水害状況 岡山県は、「晴れの国 岡山」とアピールしてきた。大規模災害の少ない県でもあった。しかし、平成30年7月豪雨により、倉敷市真備町は甚大な被害に見舞われた。 約6年半前の7月6日の深夜、真備町では、小田川と支流の川が氾濫し、相次いで決壊(8か所)、町の3割(1200ヘクタール)、最大約5mまで浸水した(浸水エリアはハザードマップと同じ)。真備町の人口の約1割にあたる2000人が逃げ遅れ、51名が亡くなった(そのうち9割が65歳以上の高齢者)。明治26年(132年前)にも大きな災害はあったが、その教訓は生かされておらず、避難しなかった理由を尋ねたアンケートでは、「これまで災害を経験したことがなかったから」「2階に逃げれば大丈夫だと思ったから」という回答が多かった。安全安心の思い込みが最大のリスクだと痛感した。 避難所となった小学校は、7/6から10/1まで開設、学校再開は9/3より、浸水した他校との共生は10/9から翌年の12/20までとなった。 ■避難所運営を通じて考えたこと(校長として避難所運営に携わって…) ○筋論やマニュアルは通用しない(しかし、実効性のあるマニュアルは必要) ・「避難所運営は、本来市の職員の仕事」と言われるが、避難所に、行政担当者は一人かもしれない。 ・発災直後に災害ボランティアは入らない。 ・非常時は平時とつながっている。 ・災害時には、ヒトとモノが不足する。まさかの事態に地域の資源を最大限に生かすことができるよう、事前に地域住民や支援団体、行政等とつながっておくことが大事。 ○人を救うのは人 ・人の命や生活を奪う災害に向き合ったときに、どう行動するか。 ⇒目の前のつらい思いをしている人のために、少しでも安定した環境を提供することができないか、救えないかもしれないけれど、寄り添うことはできるのではないかな…。 ・正解はどこにもない中で、できることを、できる人が、できるときにする。 ⇒同時多発的に問題に直面し、判断を求められる状況。目の前に問題が表れたとき、誰が解決するのだろうと考えるのではなく、どうやって解決するかを考えることが大事。 ・動かないと何も進まない「Do&Think」 ⇒「考える」と「実際にやってみる」の差は大きい。 ・リーダーとリーダーに協力する人が必要。チームで動くこと(組織)が大事。 ⇒私自身も教職員や支援団体等に助けられ、支えられた。チームの力を実感。 ■災害発生・避難所運営 平成30年7月6日の夜、避難者が想定外の多さだったことで、教室も開放せざるを得なかった(学校防災マニュアルは通用しない)。7月7日の早朝に届いた食料は、人数分には到底足りなかった。食料の配給に長い列ができ(まるで戦時下のような状況)、食べ物がなくなることがこれほど悲しく心細いことかと思った。断水によりトイレが詰まり始め、プールの水を運ぶ。固定電話・インターネットが遮断され、自分の携帯電話でしか、情報収集や児童の安否確認ができない状況となった。 教職員の協力により、避難所を安定に向ける。(教職員の勤務時間を6時間にして、二交替制にする)。避難所の学習室で、児童の災害遊びが見られた。被災後の子どもたちの心身の変化等を見逃さないよう、心のケアが大切であることを痛感した。11日にエアコンが設置され、また、医療チームも到着したことにより、避難所の環境が少し改善した。支援物資の調達が滞ることがあり、ボランティアによるSNSの活用は有効であった。しかし、SNSを使えるかどうかで情報格差が生まれ、また、高齢者・外国人のニーズの把握が遅れ、支援が後手に回ることもあった。 避難所運営において、チームの力は大きかった。各種支援団体と毎日チーム会を開催し、問題

	を出し合い、その解決方法を検討し、実行していった。併せて、地域の方との会も行い、物資の配送やトイレ掃除、在宅避難者への連絡等に協力してもらった。 段ボールベッドを避難者や支援団体、教職員と協力して設置したことで、避難者の代表者を各設置場所から選ぶことができた。各場所の代表者を男性と女性の2名にしたことは、その後の避難者による自治組織(代表者会)の運営においてよかった。トイレ掃除の男女の分担、女性専用の洗濯の干場、妊婦や授乳者への対応など、女性の視点も重要であった。様々な場面において、チームで動く成果を実感した。 災害時には、情報が限定的になりがち。県、市町村、学校(避難所)の情報伝達・共有が必要。非常時には、柔軟性、臨機応変、すぐ動くことなどが重要である。 ■「まさか」を「もしも」へ(ワークショップ) 地震発生時の対応を想定したワークショップを実施。参加者は、「どのような行動をとるか」「その理由」を記入し、ペアで話し合った。 ・主な意見 初動対応:机の下に潜る、自分の安全を確保 揺れが収まった後:玄関を開ける、靴を履く、家族と合流 情報収集:スマートフォンやラジオで最新情報を得る 避難行動:避難場所の確認、一人暮らしの近隣住民の安否確認 このワークを通じて、「南海トラフ地震」のリスクを改めて認識し、個人レベルでの防災行動を考える機会となった。 ■まとめ いつ、どれくらいの自然災害が起きるかは想定外。しかし、自然災害が起きたらどうなるかは想定内に。想像力を高めて「もしも」に備えること、災害をイメージし、防災につながる行動へつなげることが大切。改めて想定範囲を広くしてほしい。大丈夫だろうと考えることがリスクマネジメントの最大の敵。リスクを見つけて、リスク対策を実行することが必要。 憂いなければ備えなし。非常時は平時とつながっている。準備をしていたことだけが命を守る。防災教育は、直ちに成果の出る特効薬ではなく、漢方薬である。子どもたちが社会人となり、例えば、桜井市から出て、東京や四国、九州などで働くようになったときに力を発揮して、自分の命を守り、大切な人の命を守ることができるのではないか。地域ぐるみで防災意識を高める取組が必要。 避難行動を、「空振り」と考えるのではなく「素振り」の練習と考えて実行すること。災害を自分事としてとらえて、持ち場、持ち場で備えてほしい。  
開催地より	被災地での避難所の現状を知ることができ、大変勉強になった。やはりトイレ環境の整備はまずしなければいけないと感じ、避難所運営に携わる各機関との連絡・調整手段の整備もしなければいけないと感じた。